

臨床社会学の方法

(14) 男らしさのラビリンス(迷宮)

中村正

暴力の現在

夫婦・親子、友人・知人、指導・被指導の関係性に宿る虐待・暴力が問題となっている。背景はそれぞれ違うが、過激なイスラム原理主義者による暴力、憎悪・敵対のヘイトクライム、子ども、女性、障がいのある「弱者」にむかう暴力は、異なる者同士の関係性の結び方に関わる構造的な、ある傾向をもった暴力として現代社会の課題となっている。暴力の発生する頻度、場所も関心があるが、それだけでなく、この社会のもつ排除と敵対、過同調からなる危険の「質」がみえてくる。

加害者個人の異常さへの関心と注目ではなく、背景にある社会問題が事件には凝縮されていると考えるべきだろう。その社会問題の軸のひとつに男性性ジェンダー問題があり、以前にもマガジン連載の「社会臨床の視界」「臨床社会学の方法」で男性性ジェンダー臨床や加害者臨床として取り上げた。今回はその一環でもある「男らしさの病理」やその背後にある「男らしさの迷宮」について取り上げたい。

というのも世界で起こっている暴力事件をみるとこのテーマが見え隠れするからだ。たとえば、

アメリカのフロリダ州オーランドの LGBT ナイトラウンジにて、2016 年 6 月 12 日、男がいきなり発砲し 50 人が死亡（内 1 人は犯人）し、53 人が負傷する事件が起こった。加害者は 29 歳男性

（死亡）である。日本でも、19 人の命が奪われた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」殺傷事件（2016 年 7 月 26 日）が起こった。優生思想や障害者の排除・差別の現実を映している。被害者は 26 歳男性。さらに 8 年前の秋葉原通り魔事件（2008 年 6 月 8 日）。7 人死亡。加害者は 25 歳男性である。他にもこうした事件がある。

これらの暴力加害者は男性である。この点について、「無差別殺人は、弱者をねらっているので無差別ではない。男性犯罪者の場合、『男の問題』としては捉えられてこなかった男性自身が、自分の立場と重ねるように考えるという姿勢・男の怒りや悔しさが暴力で発散されうるという問題を、男自身が考えるべき。」というまっとうな指摘がある。

しかし続けて、「男の犯罪を、社会問題を問う視点だけではなく『男ゆえの病』として考えること。」という結論には留保がある（北原みどり「男の暴力

秋葉原無差別殺傷事件に思うこと』『世界』2008年8月号、岩波書店)。なぜなら、「男ゆえの病」が生物学的な男性をすべて均質に扱うことにならないようにすべきだからである。そこで「男らしさ(男性性)の病理(=男性問題)」として考えてみる(詳細は次の文献に記してある。中村正「男性性・男性問題をめぐる臨床社会学—親密な関係性研究に焦点づけて—」、第50巻第1号、『立命館産業社会論集』。タイトルから検索してもらうと自由にダウンロードできる)。

男性問題としての把握

筆者なりの男性問題についての説明はこうだ(『現代社会学辞典』、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集、弘文堂、2012年。2012年版で社会学の辞典にはじめて「男性問題」という項目が加わることになった。以下のようにその項を執筆した)。

ジェンダーは性において非対称な関係性があることを指摘し、集団としては支配的な地位にあるジェンダーとして男性をとらえた。人格形成、対人関係やコミュニケーションの仕方、感情規則、行動様式等の総体に男性性のジェンダー作用がみられる。また、男性に期待されるライフスタイルとライフコースが編成され、社会的諸属性(階級・階層、学歴、職業的地位等)や家族的構成(出生順位、家族履歴、親族関係等)と相関して、個人としての男性の有り様が形成されていく。社会的役割として、ライフサイクルにおいて少年、夫、息子、父親という諸相があり、ここに家族関係、性・セクシャリティに関わり男性の多様な生活が構築される。男性役割は、弱くあることの否定、防衛機制としての虚勢(暴力)、逸脱行動と攻撃性の媒介、感情面での脆弱さ、ケアからの疎外等の動因となりやすく、全体としての人間性形成に困難をきたすように作用する。その結果、男性の生き辛さや行

動上の諸問題が派生する。

男性問題、男性性・男らしさに関わる研究も徐々に進んでいるが、女性学やフェミニズムをもとにして女性運動・政策が進んだようには男性をジェンダー秩序から「解放」しようとする運動・政策は進んでいない。ジェンダー秩序のなかでは男性も抑圧されているはずであるにもかかわらず男性研究、男性問題対策は進まない。もちろん加害性と被害性の両面があることを男性学・男性研究は指摘してきた。

たとえばアメリカの男性問題研究者、ウォレン・ファレルは、「男性が三つのW(女性 women、戦争 war、仕事 work)をめぐって命をかけることを余儀なくされた男性史」の視点を提案している。一例として、低賃金の仕事に女性が割り振られていることと対になって、「さらされる職業」(警察、消防、除染、兵士という死のリスクのある職業のこと)に男性が多く従事せざるを得ない事態は同等に注目されるべきだという(『男性権力の神話』作品社、2015年)。

この課題は、危険回避、安全確保、災害救助という領域の男性性ととともに、国家の暴力性とそれに負担している男性性との関連、秩序維持、征服・戦争にかかわる職業分担のリスクの話である。軍産複合体、戦争システム、家父長制、テロ対策、安全確保政策等が重なり合う現代社会を男性性が支えている。ファレルはその過程で、そのこと自体の内省はせずに男性被害を強調していることになる。ファレルの原書が刊行された1993年前後に筆者はそれなりに取り組みのあった米国の男性運動について調査をしていた(中村正『「男らしさ」からの自由』かもがわ出版、1996年)。

その後米国は「9.11 体験」を経て、被害だけではないテロ対策という名の自らの加害に関わる暴力問題を抱えるに至った。もちろんテロそれ自体は男性問題ではないが、「戦争・紛争は男性的な顔をしている」といえる(ストーキングヴェトラナー・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫 2016 との対比でいえばという例えとして)。男性性のもつ加害荷担とそれが被害性を招き寄せること、そしてその被害を被害と感じさせない物語が構成されていくことをみるべきであろう。戦争、暴力、正義、秩序、組織のために闘争する男性たちの物語は絶えず美化されてきた。そうしたことも統合して男性性がある。「さらされる職業」の幅は広いがフェレルにはこうした視点は弱い。この延長に、女性兵士も男女平等の帰結として存在していくのだろう。男並み平等の典型である。

もちろん、ジェンダー論は、被害と加害という二分法、あるいは女性と男性という二分類ではなく、支配と抑圧の性としての面とジェンダー秩序によって抑圧される性でもある両面を視野に入れるべきだろう。そして、男性と男性の関係性も重視し、複数の男性性 masculinities を把握する。

フェミニズム・女性学は、確かに、男性学を始動させる刺激であったし、いまでもそうであるが、二項対立的な対女性への暴力を中心とした男性の加害性の強調になりがちな面もある。そして男性が男性をコントロールするという面をうまくくいとれない。ジェンダー秩序による被害性が加害性へと展開していく様相も把握すべきだろう。

男性問題・男性性について把握すべき焦点のひとつが、暴力臨床、加害者臨床、司法臨床、非行臨床等の一連の取り組みである。さらに、他害の暴力問題行動だけではなく、自害とも重なるアル

コールや薬物依存、性依存、ギャンブル問題等があり、嗜癖と嗜虐の問題を構成する。

筆者は、男らしさの病理のスペクトラムととらえている。嗜癖・嗜虐問題としての男性問題の側面は、それが物質であれ行為であれ、自己との関係性の失調に伴い、繰り返し反復する行動となり、問題に依存した生活となり、関係性の病理へと展開していくことになる。

男性性を語る言葉は少ない

さらに、ジェンダー秩序を個人の男性が内面化していくと、現実には理想的な男性性はなく、逆に実現できない期待値としての男らしさ像によって自らを縛る。自縄自縛という面があり、男性心理としては男らしさの迷宮(ラビリンス)に陥る。それを解消しようとする問題解決行動に取り組みざるを得なくなるが、そこに用意された選択肢それ自体もこのスペクトラムのどこかに位置づいていて、男らしさの秩序にまみれ、不健康さや逸脱性を強化していくことになる。これを偽問題解決行動という。

さらに、男らしさの病理という言い方は、どこか弁解じみでいて、敗者の弁という性格をもつので、なかなか男性たちには受け入れがたい心的現実である。否認の病理ともいえる事態である。問題を語る言葉それ自体、自らの課題を語ることに自体に男らしさの畏がみえてくる。

これはジェンダーやフェミニズムという言葉が女性に解放的なインパクト(エンパワーメント)を与え、定義されていない問題を次々と構築していったことに比べるとわかりやすい。しかし男性性やジェンダー論は男性には同じようには影響を与えない。それとは逆の否定的な印象をもたれる

ことになる。だからフェミニズムに対応するマスキュリニズムという言葉はない。

こうして考えてみると、男性性を語る言葉がないといえるだろう。女性性ジェンダー論とは非対称である。「ワード word がワールド world をつくる」という「社会構築主義 (本マガジン 25 号)」からすれば、まだ言葉がなく、定義されない現実がまともになく漂流している段階である。男性性・男らしさを語ることは男性の行動と心理の考察につながる大切な領域となっているが、その動きは鈍い。当面は否定的なことと男性性の可視化をとおして男らしさの再考を促していくしかない。まさに暴力、アルコール、薬物、自傷・自殺、ひきこもり、ハイリスク行動、戦争トラウマ等のラビリンス (迷宮) のなかの彷徨と漂流を記述することが男性学研究となっていく。

その結果、男性にとってのジェンダー論は、エンパワーメントというよりはパワーダウンとして受け取られる。それは一種の去勢のようなのだろう。せめてパワーシフト程度には男性の生き方が展望でき、生き続けることができるような、男性の豊かな自己表現のテーマを拓くものとして男らしさの言葉があればと思う。この意味では、これまでのような加害と被害という単純な二分法を超え、男性のおかれた現状を具体的にとらえていくことのできる男を語る言葉がある。

男らしさの被害の語り方—個人の心理問題としてはどう現れるのか

『男はプライドの生きものだから』(テレンス・リアル、講談社、吉田まりえ訳、2000 年) ではメンタルヘルスと男らしさの相関が「隠れたうつ病」として位置づけられ、豊富な臨床事例にもとづき

記されている。身体の病気をはじめ、アルコールやドラッグ依存症、家庭内暴力、親密な関係性がもてない、職業を維持できない等である。

うつ病には二重の偏見がつきまわっている。精神病に対する偏見と、女性的な感情の障害であるという偏見である (同書 26 頁。以下同じ)。うつ病の症状が男らしくないものに見える (26 頁) ので隠れていく。

たとえば、「無条件の肯定的配慮」が子育てには必要で、子どものありのままを受け取ることで健全な自尊心が育ち、愛着関係ができる。しかし、そのままを認めることに男らしさは邪魔をする。男らしさは自分が自分を痛めることのようにして克己心をつくり、うつ病を隠していく。それは精神医学でいう「失感情症」と等価である。

嗜癖はコントロールの利かない欲求である。物や人間関係や自滅的な行動を媒介にして自尊心を調整しようとするのが嗜癖とされる。それらは一時的な安らぎとなるがそれが終わると隠れたうつ病の禁断症状がでて、再発の繰り返しとなる。隠れたうつ病者は刺激的な行動により高揚を得て、自己愛を回復するが、それは何かへの耽溺となる。仕事、恋愛、性、賭け事、浪費、鍛錬である。

正常な域を越える嗜癖は、ありのままの自分を認められない。隠れたうつ病者にとって、これらは楽しみでなく苦痛からの解放となって嗜癖・嗜虐に至る。陶酔感、自己誇大化がある。その実行時には「大洋的至福」が訪れ、一種のパワー感を得る。アルコール、薬物、ヘロイン、過食、衝動買い、性、恋愛嗜癖は理想化した愛の対象者への一体化願望があり、自己の価値をその対象をとおして実行 (72 頁) し、ストーキング的となる。権力を乱用する虐待行為は他者を支配して自己を誇

大化する。見捨てられる事への不安もあり、暴力は怒りという感情に嗜癖して発現する行動依存となる。

男らしさの病理をつくる「隠れたうつ病」は関係性の喪失に関連している。母親、自分、他者とのつながりが切れることを男の子の成長として観念する傾向がある。男の子に必要なことは男らしさではなく愛情であるにもかかわらず、成長が母親との関係遮断をとおして、つまり他者との幼児的なつながりから大人のつながりに転化することだと観念される。

そして、自分の気持ちとのつながりを断ち、自分の感情を自分に対して隠すことになる。失感情症は「嗜癖的防衛機制嗜癖」をもたらす。苦痛を麻痺させる自己治癒だけではなく、その麻痺した感情を蘇らせるための行動という面が嗜癖行動である。たとえば、危険を伴う行動、賭け事、人や物への陶酔、激しい怒りである。闘争と逃走を刺激する。

しかしこうした男らしさの病理に特効薬はない。あくまでも関係性の回復が大切となる。助けを求める行動それ自体が心を癒やす行動にもなる。女性と比べるとわかりやすい。「自らの弱点を曝したときに人と人との絆は強まるという智慧を女性はもっている。強くなろうと、弱点を認めまいとする男の姿勢は自分以外の人に対しても適用されて、弱者への同情心が薄く、思い上がりの強い人間をつくっていく。人間らしい感情を失い、表現力を失う」。だから、「他者とのつながりを学び直すことが回復への道(160頁)」となる。

男の子への虐待には、子どもを無力化するような虐待があるが、もうひとつ、たとえばやればできるといいながらスパルタ教育のように、とりわ

けスポーツを教え込むようなタイプの虐待がある。グループワークの虐待父にもこのタイプが多い。これを「根拠のない有力化(エンパワーメント虐待)」という。そうなれない少年の場合、隠れたうつ病を宿す。

さらに、精神医学者リフトンのいう「自己疎外」も男らしさに関係する。これは、他者への人間らしい感情を遮断することは自己の感情にふたをすることになるという。これを「ダブリング」の過程という。男らしさの病理と重なる側面である。期待された像としての男らしさから程遠いという自己評価によって落ち込むが、それを言葉にできないというジレンマを抱える。戦場から帰った兵士たちのトラウマの一面を構成する。

また、DVが妻のうつを悪化させる場合もある(314頁)。これは筆者の経験とも重なる。関係性の病理としての家庭内暴力という意味である。虐待親のグループワークでもその様子を語る参加者がいた。彼の妻がうつ病だという。これは「転倒」していて、だから自分が家計を維持し、子どもの面倒もみており、おまけに妻のケアまでしているという。だからそこでのストレスで暴力がでてもやむを得ないという。みずからの暴力の言い訳のように作用している。この「転倒した意識」をグループワークでは扱うことになる。

関係性の病理とは、たとえば女性が無力な人間を装い、隠れたうつ病にある男性を元気づけようとする等が該当する。暴力被害者が加害者のために努力するという関係となる。絆を維持しようとする女性性ジェンダー役割に根ざした親密な関係性における暴力の効果といえる。暴力加害を被害者が修正しようとする。隠れたうつ病の夫を強い男のままにしておくために自分がより弱くなろう

とする女性の被害は DV の結果なのである。

それでも変化を阻む男性的思考との対話

家庭の内外を問わず、暴力は男らしさの病理の典型である。特に家庭内の対人暴力は何らかの分離的な介入が要る。その後、脱暴力をめざすグループワークやカウンセリングを行う。男性たちと対話していると、たくさんの正当化や抵抗・防衛がなされる。端的には言い訳であるが、少々扱いに工夫のいるものがある。

たとえば「そんなに褒めないでください。なんだか安っぽい男性のように聞こえます。」「半年くらいグループワークに通ったので私はもう大丈夫です。」「確かに家庭のなかでの暴力はよくないと反省しますが社会では通用しないのでグループワークでやっていることとバランスがとれません。」「グループワークやカウンセリングに来るかどうかは自分で決めます。」「グループワークの脱暴力の目標に向けた工程表のようなものをください。自己改造します。」「複雑な人間関係は嫌いです。妻や子どもとの関係はやっかいなのでシステム思考が働きません。コミュニケーションスタイルの違いでしょう。」等である。

そしてグループワークやカウンセリングが「内面」へ侵入してくるようなものとして受け取られている様子も語る。「(脱暴力が課題のカウンセリングのあとは) なんだか脱力していく感じがするので困惑します。生きていきにくくなります。」「自分としてはこれまでよい環境や人間関係ではなく逆境のなかを生きてきたと思っています。親父からの暴力もありました。だから男らしく強くなれたのです。この社会を生きていくのに強さは要るでしょう。」という具合だ。

さらに別言すると、プログラムやカウンセリングに操作されている印象をもち、改心を強いられるように感じている。他律的になっていくことへの恐れとでもいえるだろう。暴力はだめであるという上から目線で、外部の力によって、思わず指示されていくことへの忌避感のようでもある。

グループワークやカウンセリングではこうした「男らしさの鎧」のような意識と「格闘」することになる。変容を促す際の障害物となっているようにみえるが、当人たちにとってはそうではない。変化する社会を生き抜く戦略として観念されている。社会のなかの暴力肯定性や男性のあり方を都合よく選択し、再構成し、取り込んでいるともいえる。こうした意識といきなり闘っても無理だ。その機能や役割を一緒に考えていくことになる。なぜなら社会のもつジェンダー意識と共軛関係にあり、それを否定して反省を迫ると空虚感がでてくるからである。代替的に活性化できるものを補填する必要があるからである。

これはもちろん自己中心的なものの見方や捉え方でしかない。妻や子どもや親族から指摘されても聞く耳を持たないどころか、公的機関が介入してもそれに反抗することがある。「私的なことに介入しないでほしい。」「暴力を振るわれる方も問題がある。」という二つが共通している(これは別に記述した。「暴力臨床論」『立命館文学』646号、2016年。タイトル等から検索してもらうと自由にダウンロードできる)。

こうした男性たちのコミュニケーションは独特であり、いったんはこうしたスタイルに即して対話を進める必要がある。暴力や虐待は駄目であるというだけでは、彼らは脱暴力から遠のくばかりで、脱暴力への動機が形成されない。対話をと

して気づいたことがたくさんある。

男らしい意味付与

第1は、男性たちにとっては褒めるという行為は上から視線と感じるようだ。確かに褒めるという行為は上下関係において効果がある。評価する者が常に褒めることになっている。だから、男性たちは褒められると上下関係に置かれたように感じるようだ。地位降格のコミュニケーションのシンボルのようになっている。こうした男性たちにとって、褒めることができる人は自分を押し上げてくれる信頼できる人に限定される。これは権力や地位という要素をもつ。しかもそう簡単に褒められることはないからこそ価値がある。こうした志向性をもつコミュニケーションが男性性には内包されている。

第2に、男性の自己愛がこうした態度や意識に related している。「男性は自律性や個人的達成を重視する。・・不適応的自己愛の行動面での表れ方が男女によって異なることが示唆されている。たとえば、女性の場合は、より依存的で執着的な対人行動に、男性は、搾取・利用や権力への執着、リーダーシップ等の行動に表れるとされており、極端な場合、男性は、他者からの賞賛や愛情を得るために、虚言を繰り返す誇大的な自己をアピールしたり暴力をふるったりする傾向があるとされている。」(「自己愛に関する研究の概観—ナルシズムとセルフラブ、および、質的な性差に焦点を当てて」松並知子『四天王寺大学紀要』第56号(2013年9月)。

単にパーソナリティとしての自己愛型ということではなく、社会的役割としての男性性ジェンダーの内面化である。

第3に、男性性は、他者への操作性をコントロ

ールとして発揮することを重視する。だから禁止的なメッセージが強くなる。しかしそれが自らに向けられた場合は操作性や他罰性と映り、防衛・抵抗となる。さらに反省を強いることにも強い抵抗が働く。権威に対しては面従腹背となる。

こうした男らしさの諸項目をリストアップすると、自律性・能動性の過剰さ、メンツ意識、有能感・万能感の確保、自惚れ的な自己愛、他罰性への傾斜等となる。これらは「男らしさの鎧」のように機能する。

自縄自縛する男らしさ

先のグループワークでの言葉をささえる男らしさ意識は、暴力と虐待、統制と支配、他罰的意識、ケア能力の弱さ、失感情症的、親密さ回避、関与の困難、去勢恐怖(脆弱さの否定)、自己顕示的な虚勢(暴力による俊立)等となる。

とはいえ、現実には期待どおりの男らしさではない。自己嫌悪へと至る現実をたくさん抱える。身体的な劣等感(ハゲ、デブ、チビ)、伝統的な男らしさ像である「呑む・打つ・買う」ができない男性たち、冒険心のなさ、童貞男性へのさげすみ、ぼっち君(孤独が怖い)、非モテ系、「女々しさ」、おくて、感じない男、親密さ恐怖、関係性恐怖等を対象にしてみると、男らしさの苦悩や呻吟の一覧表ができあがる。

自己肯定・他者肯定から遠いところで

こうしてみると、「そのままがいい」「自分は自分であっていい」という自己肯定から程遠いところに男性性の意識がある。

いつも「ちきしょう！」といいながら、現在の自分を否定し、乗り越えようとする、野心的でも

あり挑戦的でもある独り言は、時に自傷的な努力を強いて克己心を煽ることもなる。どちらかといえれば男子学生に多く見られる。

それが男の子の発達にも現れる。母子関係や発達の性差を研究しているナンシー・チョドロー(『母親業の再生産 - 性差別の心理・社会的基盤』大塚光子・大内菅子訳、新曜社、1981年)やキャロル・ギリガン(岩男寿美子訳『もうひとつの声-男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店、1986年)らの指摘がある。男性的なライフスタイルのコアには男性的なアイデンティティ形成があり、それは男性が絶えざる自己否定の中を生きることをとおして可能となる。「男女いずれの子どもにとっても、母親は退行と自律の欠如を象徴している。男の子はこの問題を性の同一化と関連づけて考える。母親への依存、愛着そして女への同一化は、男性らしくないことを表象している。つまり、男の子は依存を拒絶し、愛着や同一化を否定せねばならない」、「男性の発達が女性よりも複雑なのは、男の子は期待される性の同一化と性役割とみなされるものを手に入れるためには、同一化の対象を変えねばならず、それがむずかしい」とチョドローはいう。

こうなると男の子はいつも自らの特質を否定的な形でしか定義できないことを意味する。女の子の同一化対象は母親にむかう。男の子は母親との親密な関係を否定して同一化対象を設定しなければならぬ。発達をとおして性別役割が再生産されていくこととなるが、その過程で男の子は独自の心的作業を試みていることになる。男の子の人生において、自立とは、女性的なものとの関係を絶ちきり、母性と異なるものへの自己同一化となる。なんらかの切斷、飛翔、決別等の作業がおこなわれている。これも一種の関係切斷を意味し、

象徴的な暴力性を帯びる。男性的とされる生き方とかかわる競争をささえる克己心も耐えざる自己否定の連続だといえる。

また、男らしさは、一方では、強いことであるとされながら、他方では、やさしいことだという矛盾する中身を要請される。唯一の男らしさの定義は「女らしくない」というものでしかない。つまり、ここでも否定形でしか男の子の自己像が描けないことになる。無条件の自己肯定には係留しにくい男の子の心理的特性がある。それは絶えず進歩する意識をもつべきだという右肩上がり時代の男性の社会的役割に符合する心理でもある。

否定形のアイデンティティのシンボルは暴力である。他者を否定し、対話を拒絶するのが暴力である。女性や子どもに向う暴力だけではない。男性自身も被害者として襲われる暴力(男性同士の暴力)もある。性被害をうけた男の子(男性)は名乗りでにくい自己抑圧のなかを生きざるをえない。

暴力、逸脱行動、自殺、過労死等の社会病理現象とかかわって男性研究の主題がジェンダー論をとおして浮上すると考えるが、その背景には、ここでみたようなアイデンティティ形成という根幹に関わるテーマが存在している。その中心に否定形のコミュニケーションモードが入り込んでいる。これは男性性に課された心理社会的負荷といえる。文字通り、「男もつらいよ」的な状況である。

男らしさから遠いところにあるケア-上野千鶴子さんの指摘

自己肯定から遠いところにある男らしさがあるとすると、少子高齢社会の今後を考えたとき、ケアと男性性のテーマが課題となる。「育児・ケアは

非暴力を学ぶ実践」と上野千鶴子さんという(2014年5月14日付『中外日報(ほっとインタビュー)』)。

・・縁は弱さでつながります。強い人はつながる必要がありません。弱さでつながるためには、自分が弱いと認めなくてはなりません。・・女にはそれが何とかできますが、男にはできません。自分を弱いと認められないのが男の弱さです。「男らしさ」には三法則がある。・・第一は人生の窮地に陥った時の現状否認。現実を認めない。子どもが障害を持って生まれたり、不登校になったりしてもそれを認めない。第二は逃避。逃げ隠れする。妻の話の聞かない。家に帰らない。残業をやって遅くなる。第三が嗜癖。逃避した先にハマる。溺れる。そのメニューは酒、ギャンブル、女など、たくさんあります。それから第四法則として、キレル、と言う人もいます。

端的な指摘である。ケア行為は伝統的な男性性と対極にある。ケア行為に男性がどうかかわるのか、大介護時代を迎えて応答すべきであるが、しかし現実には、筆者なりに名づけている「ケアからの疎外」という事態がある。老老介護、息子介護、夫介護も比重が大きくなり、介護離職も喧伝される社会問題ともなっている。男性のケア力向上は虐待防止という意味でも重要である。さらに上野さんはこんなエールも送る。

子育ても介護も、する側とされる側の関係は非対称です。目を離したら死んでしまうという、絶対的な強者と弱者の関係。ケアする側にとっては、相手に振り回される、うっとうしい経験でもあります。「いっそベランダから投げ落とそうか」という気持ちを一度も持たずに子どもを育てる母親なんていないはずなんです。女の人たちは「よくもこの子を殺さずに育て上げたものだ」という

感慨をどこかに持っていると思います。親を介護しながら「一日も早く死んでほしい」と思う家族介護者もいることでしょう。そういう関係の中で嗜虐性や暴力性を抑え、自分の力を使わないでいる経験を積むことについて、「ケアは非暴力を学ぶ実践」と、私は言っています。自分の嗜虐性と暴力性をどう抑制するのは経験と学習です。その経験の場を男から奪うなどと思います。・・そこに男も関わり、非暴力を学んでいってほしい。

相模原の障害者殺傷事件に照らして考えると次の発言も鋭いと思う。

生きること自体は自然な本能だと皆どこかで思い込んでいる。だから、死ぬことに価値や意味を見いだすために、過去いろいろな人たちがいろいろなことを言ってきた。正義や真理、国家など、いのち以上の価値が世の中にあると言ってきたのがナショナリズムであり、軍国主義であり、全体主義であり、宗教もその片棒を担いできた。そのために営々と男たちが知恵を絞ってきた。・・。重度の障害を持つ人などに対して「こんなになってまで生きていなくてはならないのか」と、生きる価値のあるいのちと、生きる価値のないいのちを選別する思想もあります。ということは生命以上の価値があれば、そのために生命を犠牲にしていということになる。そして生命に価値の序列ができ、選別が起きる。障害者たちはずっとそういう目に遭ってきた。

(<http://www.chugainippoh.co.jp/interviews/hot/20140514-001.html>)

女性たちのレジリエンス—三度の翻身

柔軟な対応を求められるケア行為。それと男性性の関連は今後の大きなテーマとなるだろう。鶴見俊輔さんが熊本で絵本の会をやっていたときの

話を思いだした。

女性は嫁ぎ、名字を変える。自分を変えていかなければならない。そこで培われていく力強さがあるという。生まれた町と、子どもの手をひいて歩いた町、つまり子育てした町、自分が死んでいく町を転々としながら、自分の身を変容させていく。そこには男のレジリエンスと違う関係のなかでの育みがある。いじめがあったり、差別があったりしても、子どもの手を引いて歩くことによって何かが育つ。嫁いびりもあるかも知れないが、関係性のなかで意識が構成される。絵本の会で、関係性のもつ束縛も含めて女性たちが語る。そうした女性たちの力を鶴見俊輔さんが感じたらしい(鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本研究会、1995年)。

筆者も小さな娘を連れて、単親赴任したことがある。単身赴任でない。それはサンフランシスコだった。普段、保育園に通って子育てしたところは京都の御室(おむろ)。子育てした町には独特の愛着があり、いまでも鮮明に記憶に残っている。自らの出生地とは異なる広がる関係性(子どもとの関係だけではなく、子育てにかかわるすべての人たちとの関係性)がある。そして、時間や空間の見え方も違う。速度も違うし、高さも違う。子どもの手をひいて歩くと時間かかるけど、いろんなものに眼がはいる。体験の構造が異なるものだった。子どもを育てて親になっていく。これを親子年齢という。

支配の心理をこえて

こうしたケア行為は常に「対関係」でもある。相手がそこにいる。具体的な他者として。非対称関係性のなかで成される行為である。しかしそこ

には苛立ちも相当にある。それをとおして培われる力がある。

関係性の理論と実践ともいえる対象関係論はこの視点をもっている。ウィニコットも「男ゆえの病」について、「支配者の心理」として記している(『子どもと家族とまわりの世界(上)赤ちゃんはなぜなくの-ウィニコット博士の育児講義』、D.W.ウィニコット著、猪股丈二訳、星和書店、1985年)。

支配者配者の心理を研究すれば、とりわけ支配者自身の私的な闘争のなかに、今なお女性からの支配を無意識的に恐れ、女性に順応し、女性のために行動し、そしてそのかわりにあらゆる服従と「愛」を要求することにより女性を統制しようとしている心理のあることが分かるでしょう(4頁)。・・・女性恐怖は、集団の中で外見的に非論理的な行動をとる人の主な原因なのですが・・・各個人の生活史のなかで恐怖の根源をたどってみると、この女性恐怖は依存ということ、つまり生まれたばかりの頃の絶対的依存を認めることの恐怖であることが分かります(5頁)。

ケア行為は依存と自立の関係をめぐる行為である。セルフケアも含めて介護と育児の未来を考える上では欠かせない領域であり、男性性と関連が問われる課題となっている。現在では、せいぜい、「ワークライフバランス」という言い方で仕事と会社を中心の男性たちの生活を組み直すという点に関心が集まる程度である。

男性の生活や家族領域における課題は「ケアへの接近」といえる。そのため社会的条件の整備が不可欠である。たとえば「イクメン」と「ケアメン」という言葉が流通している(こんな言葉はなくしたいが)。男性介護者は、夫が妻を介護する

場合と息子が親を介護する場合として増加し、2004年には両者あわせ25%をこえた。高齢者虐待の事件化と重なるリスクとともに語られるようになったがリスクばかりではなく家族介護者として期待もされていく。

育児については、男性が育休を取得する比率を高める努力が継続され、そのための条件整備はすすむ。直近では2009年に育児・介護休業法が改正され、父親が育児休業を取りやすくする改善となっている。たとえば妻が専業主婦であっても取得可能となり、産後8週間以内に育児休業を取った場合は再度取得可能なこと、両親双方が育児休業を取得した場合は育休可能期間を2ヶ月延長できる等である。

とはいえ、子どもをもつ予定の男性の43.4%は取得を希望しているが実際の取得率は1.23%に止まる現実はあまり変化していない。

また、現在第10回調査となる厚生労働省の「21世紀出生児縦断調査」は子どもがゼロ歳時点での子育て調査となっているが、そのなかでは1週間の労働時間が60時間を超えると父親の育児参加の度合いが大きく低下する傾向が指摘されている。また、夫による妻介護の場合にみられる介護離職もある。

これらを一言で言えば、「ケアからの疎外」といえるだろう。男性が育児や介護に関与しにくい理由は社会的につくられているということである。

ケアへの接近とケアからの疎外

ケアへの接近は、家族的介護や育児の責任を家族にのみ押しつけることになるという点には留意しつつも、男らしさ再考にとっては重視したい。仕事の時間以外のボランティアな活動領域や時間

の確保、そうした活動がもつ仕事へのよい影響という点でも重要であり、仕事上の能力にも活きる。現代社会において求められる社会人力である「他者とともにある、多様性のなかを生き抜く、自分で決定できる能力」として定式化されているキー・コンピテンシーにも近い。

ワークライフバランスは脱会社人間的な人生の時間配分、余暇や趣味との両立、親しい関係や弱い者や弱くあることとの関係づけ、家族的責任とジェンダー平等、男性性の社会的基盤の解消という方向性で強調されるべき論議にまでの広がりが必要となる。公的には父親政策や男性問題対策、働き過ぎ対策とも重なる。

さらにケアする力の形成は男性の感情生活や生活自立を助ける。男性の生き方に幅を与えることとなる。社会的弱者への理解と行動は自らの人生の強弱の理解を助ける。自律的でない人への支援ということは仕事の価値観とは異なるテーマである。障老病苦との関係づけは無条件の自己肯定・他者肯定の典型的テーマである。

たとえば、受験失敗、リストラや失業、離婚、病気や中途障害にはじまる一連の「挫折体験」は、会社中心社会の階層構造の落伍者、家族中心社会における稼ぎ手役割からの落伍者という負の烙印となり、男性に心理的負荷をかける。うまくいかない出来事それ自体に直面し、なんとか努力する前に、男らしさという心的現実を再構成する必要がでてくる。いわゆる挫折を「受容」という作業である。うまくいかないと、自暴自棄になり、ギャンブル、アルコール、暴力と怒り、孤立等という男らしさの病理にまみれることとなる。回復し、リハビリし、待ち、ふがいなくなることを受け入れるということはケア行為から学ぶことだ

う。

無条件の他者肯定が求められるケア行為は伝統的な男性性とは程遠い。しかし生き延びていくには不可欠の活動でもある。男性にもそれが求められるようになっていく。

男性たちがこうした事態を受け入れるためには、無条件の自己肯定の体験を経由するべきだろう。伝統的な男らしさに内在するケアからの疎外を懐疑しはじめる契機となる。ケアの領域に関与することのできる男らしさ像はこれまでの男らしさとは異なるからだ。

また、ケアすることの意識化は「ケアされること」の意識化にも通じる。依存することと男性性の関連である。「高学歴男性、家事遂行度の低い男性、夫婦愛意識が強い男性では妻への依存度が高くなる」という指摘がある(松田智子「高齢男性の依存性に関する一研究」(『社会学部論集』第 34 号、仏教大学、2001 年)。

これをケアとの関連で見ると、女性への依存となり、自らケアする諸力や第三者にケアを託するという力、そして何よりもケアを受ける力という意味でのケアされる能力の形成を伝統的な男らしさ意識は疎外しているといえる。

男らしさの迷宮からのエクソダス (脱出と逃走)

無条件の肯定は、親密な対の関係性だけではなく、社会的な関係性においても男性性からみて課題となる。組織のマネジメントの場面、指導と被指導の場面等である。家庭内でも子どもが不登校やひきこもりになると父親はそれを認めがたい。強い自立の像があり、それが男らしさ意識と共振し、弱くあること、依存すること、病むこと、老

いること、問題を抱えること等を否定する。肯定すべきことは無際限ではないにしろ、人が生きていく上で苦しくなること、脆弱になることはありうることなので、強い個人だけを想定せずに入ることが大切となる。他者との関係性と自己への配慮は男らしさの迷宮からの出口の契機となる。

脱暴力のための特別で万能なプログラムやカウンセリングがあるわけではなく、暴力を含んだ生き方そのものの変容への長い取り組みがあるだけである。

2016 年 8 月 31 日受理

中村正 (なかむら ただし/臨床社会学、社会病理学、社会臨床論)